

# 立ち返って静かにすれば

「イザヤ書」からの説教 (No.4)  
【聖書箇所】 28章1節～33章24節



【主要聖句】

30章15節「神である主、イスラエルの聖なる方は、こう仰せられる。

『立ち返って静かにすれば、あなたがたは救われ、落ち着いて、信頼すれば、あなたがたは力を得る。』」

## ベレーシート

●イザヤ書は66章からなる大預言書ですが、前半は1～39章。後半は40～66章と二つに大別されます。前半の1～12章は「**小イザヤ書**」と呼ばれていますが、その所以はイザヤ書全体の中に展開する重要な語彙や思想がそこにコンパクトにまとめられているからです。続く13～23章では「**諸国に対する神の宣告**」、また24～27章は「**イザヤの黙示録**」とも呼ばれ、「世の終わりについての預言」が一括されています。続いて、28～33章は、アッシリアの勢力に脅かされて、エジプトの軍事的支援を頼り頼もうとするユダに対するさばきと、真の希望(救い)は神に信頼することから来ることを呼びかける内容となっています。

●神に召された預言者としてイザヤが語るべきメッセージは、ニーズに合わせて人々の心を喜ばし、励ますようなものではなく、むしろ逆に、神のことばを語れば語るほど人々の心が頑なになり、神から離れてしまうようなメッセージでした。多くの人を神の救いに導くための働きなのですが、結果としては、むしろ人々を神の救いから遠ざけるような働きとなり、なんら生産性のない結果となる働き、それがイザヤの生涯の務めでした。なぜ、イザヤの語るメッセージが人々の心をかたくなにしたかと言えば、それは「神に立ち返り、神に信頼して、静かにしていなさい」と語ったからです。なぜ、人々はこのメッセージに心がかたくなになったのかと言えば、それは「静かにしていられなかった」からです。イザヤが預言者として召された時代は、東の方からアッシリアという強大な勢力が中東、そしてエジプトにまで拡大しようとしていたからです。中東の国々は蜂の巣を突いたように、右往左往します。どちらの国と手を結んだら生き残れるか、そうした政治的判断が求められ、それぞれの国が反アッシリア政策をとって、同じ政策を取る国と同盟関係を結ぶか、あるいは親アッシリア政策をとってアッシリアの言いなりになっても国を保持すべきか、そのいずれかを決断しなければならない状況の中で、イザヤが語ったメッセージは「何もすることなく、主を信頼して、静かにしていなさい。」でした。これがユダの人々の心をかたくなにさせたのです。

●イザヤの語るメッセージは神の民がエジプトの支配から救われて以来、なんら変わらないメッセージです。神こそ王(統治者、支配者)であるという基本的な信仰が語られているだけです。神の民の生存と防衛の保障は、王である神にあるという信仰です。この信仰が受けとめられないところに実は大きな問題があったのです。

●エジプトを出て、カナンへの地に入ってもイスラエルの民とカナンの民族、及び周辺諸国との戦いは続いていました。しかし、時代を経るにつれて、イスラエルの民が経験したこともないような、予想をはるかに越えたアッシリアという強大な勢力が立ち上がって来たのです。すでに、北イスラエル(エフライム)の首都サマリヤは陥落し、そこにいた人々がアッシリアへと捕囚されたことを知ったユダの人々にとって、アッシリアは脅威そのもの

だったのです。

## 1. エジプトと同盟を結ぼうとしたユダの人々

●エルサレムにいるユダの指導者たちである祭司たちや預言者たちは、アッシリヤの勢力に脅かされ、エジプトの軍事に頼ろうとして同盟関係を結ぼうとしました。そのことを、主は「死と契約を結び、よみと同盟を結んだ。」として叱責しています。しかも同盟を結んだ祭司と預言者たちを、比喩的表現として、ぶどう酒や強い酒のために「よろめき」「ふらつき」「混乱し」「よろける」者として、彼らを叱責しています(イザヤ 28:7)。

- ①「よろめく」と訳された「シャーガー」(הָשָׁרָה)は、「(神意から)迷い出て、正しい判断ができずに過ちを犯す」という意味。
- ②「ふらつく」と訳された「ターアー」(הִתְעָרַר)は、目がくらんで「さまよう」という意味。
- ③「混乱する」と訳された「バーラア」(בָּלְאָה)は、本来「飲み込む」の意ですが、ここでは受動態なので「飲み込まれる」「(酒に)おぼれる」という意味。
- ④「よろける」と訳された「プーク」(פָּוַק)は、「よろめいて正しく判定できない、判定を誤る」という意味。

●このような指導者たちがエジプトと同盟を結んでアッシリヤの危機から守ろうとしたのです。「私たちは死と契約を結び、よみと同盟を結んでいる。たとい、にわか水があふれ、越えて来ても、それは私たちには届かない。…」と(28:15)。「にわか水」とは「奔流、洪水」のことで、アッシリヤの勢力を意味します。彼らはエジプトとの同盟によって、そこに避け所と保護を見出したと主張したのです。つまり自分たちを信頼し、主である神の助けは必要ないとしたのですが、結局のところ、エジプトとの同盟は水泡に帰する運命にあるのです。

●自分たちが取った巧みな政治的判断によって、自分たちは安全だと考えているユダの指導者たちに対し、主は、「**死との契約は解消され、よみとの同盟は成り立たない。にわか水があふれ、越えて来ると、あなたがたはそれに踏みにじられる。**」と予告します(28:18)。彼らが信じている避け所や隠れ場は全く役に立たないだけでなく、「にわか水」は繰り返し、繰り返し、何度でも押し寄せて来ること。それゆえ、「この啓示を悟らせることは全く恐ろしい。」(28:19)としています。この部分を他の訳で見ると以下のように訳されています。

- ①【新共同訳】「この御告げを説き明かせば／ただ恐怖でしかない。」
- ②【口語訳】「このおとずれを聞きわきまえることは、全くの恐れである。」
- ③【岩波訳】「啓示を解き明かすことは、ひたすら戦慄すべきこととなる。」
- ④【フランシスコ会訳】「このお告げを理解することは、恐怖でしかない」
- ⑤【中沢訳】「お告げを悟らせることは、まったく恐ろしい。」

●ユダの指導者たちは、「死との契約は解消され、よみとの同盟は成り立たない。にわか水があふれ、越えて来ると、あなたがたはそれに踏みにじられる。」という主のメッセージを無視していますが、もしこのことを正しく理解するならば、災害のあまりの大きさに、驚きと恐れとで心が戦慄してしまうことを意味しています。

## 2. 「シオンに据えられる一つの石」の預言

●こうしたやり取りの中で、天からの一筋の光が差し込むような呼びかけがなされています。それが 16 節のこ

とばです。

【新改訳改訂第3版】イザヤ書 28章 16節

だから、神である主は、こう仰せられる。「見よ。わたしはシオンに一つの石を礎として据える。これは、試みを経た石、堅く据えられた礎の、尊いかしら石。これを信じる者は、あわてることがない。

●冒頭の「見よ」は、終末預言(メシア王国、千年王国)を示唆することばです。神が主権をもってなされることに、「目を向けよ」との呼びかけです。16節にある「一つの石」「試みを経た石」「堅く据えられた礎の石」「尊いかしら石」の「石」(「エヴェン」**אֶבֶן**)は単数形です。「メシア」を表わす比喩的表現ですが、御父から油注がれて王として治める御子は、ヘブル語では「子」を表わす「ベーン」(**בֵּן**)なのです。ヘブル語が理解できると「石」(「エヴェン」**אֶבֶן**)と「子」(「ベーン」**בֵּן**)、このつながり(ヘブル的なシャレ)が分かります。さて、この石についてはさまざまに描写されています。

### (1) 神が「据える」一つの石

●「据える」という動詞は「ヤーサド」(**יָסַד**)の完了形で、ここではその強意形のピエル態が使われています。「堅く据えられた」という完了形です。必ずそうなることを意味しています。

### (2) 「試みを経た石」

●「試みを経た」とは、困難とか試練を経た石という意味です。自然界の石は灼熱の太陽の熱に照らされ、あるいは激しい雨の力に叩かれ、また風に吹かれたりします。そうしているうちに風化していきます。持ちこたえられない石は崩れてなくなりますが、ここでの「石」は永遠の石であり、風化することなく、どんな熱にも激しい風雨にも耐えることのできた石です。厳しくテストされた石こそ土台(礎)となるという意味です。神が備えてくださる石とは、どんな試練の中にあってもそれに耐え、屈伏しなかった勝利の石となるのです。

### (3) 「尊い石」

●「尊い」と訳されたヘブル語は「ヤーカール」(**קָדֵשׁ**)という形容詞で「非常に高価で、他に見ることができない」という意味です。二つとない、類例を見ない特別な石なのです。

●そのような「石」を信じる者は「あわてることがない」としています。「あわてることがない」という動詞は未完形で、やがてメシア王国が到来する時までずっとという継続的な意味合いを持っています。にもかかわらず、メシアであるイエシュアがこの世に遣わされたとき、人々はこの「石」につまずき、見捨ててしまったのです。実はそのことも聖書の中に預言されていました。詩篇 118 篇 22～24 節がそれです。

【新改訳改訂第3版】詩篇 118 篇 22～24 節

22 家を建てる者たちの捨てた石。それが礎の石になった。

23 これは【主】のなさったことだ。私たちの目には不思議なことである。

24 これは、【主】が設けられた日である。この日を楽しみ喜ぼう。

●イザヤ書 28 章 16 節の約束をメシア預言として、使徒パウロと使徒ペテロは以下のように引用しています。

①【新改訳改訂第3版】ローマ書 9 章 33 節

それは、こう書かれているとおりです。「見よ。わたしは、シオンに、つまずきの石、妨げの岩を置く。

彼に信頼する者は、失望させられることがない。」

②【新改訳改訂第3版】ローマ書 10 章 11 節

聖書はこう言っています。「彼に信頼する者は、失望させられることがない。」

③【新改訳改訂第3版】Iペテロ2章6節

なぜなら、聖書にこうあるからです。「見よ。わたしはシオンに、選ばれた石、尊い礎石を置く。

彼に信頼する者は、決して失望させられることがない。」

●イザヤ書 28章 29節には、万軍の主のもとから出るすべての「はかりごととは奇しく、そのおもんばかりはすばらしい」とあります。「はかりごと」と訳されたヘブル語は「エーツァー」(הַצֵּאָר)で、ここでは主のご計画(マスタープラン)を意味します。「おもんばかり」と訳されたヘブル語は「トゥーシヤァー」(תּוֹשִׁייעוּ)で「英知」、あるいは「救い」とも訳されます。

●ユダのシオンに一つの石、礎の石、要石、頭石が置かれるということは、メシア王国が岩の上に建てられ、どんな嵐にも安全であるということが保障されています。その石の上に建てられる主の家(神の王国)に私たちは招かれています。主の救いのマスタープランは不変です。すでにそれは神のご計画の中で明確に定められています。その「主の定め」を知ることは、神を愛することと同義なのです。「主の定め」を知ることは私たちの信仰を強いものにします。最後が分かっこそ、今を、ゆるぎない希望をもって生きる力が与えられます。この希望は失望に終わらないことを確信する者は、そのことをだれに対しても語れる(説得・論証できる)者とならなければなりません。なぜなら、これはイエシュアが語られた「御国の福音」だからです。「御国の福音」とは神のマスタープランのことです。「この御国の福音は全世界に宣べ伝えられて、すべての国民にあかしされ(論証され)、それから、終わりの日が来ます。」とイエシュアが語っておられることを心に明記しなければなりません。

### 3. エジプトに抛り頼む者の運命

●前にも述べたように、イザヤ書 28～33章はアッシリヤの勢力に脅かされて、ユダの指導者たちがエジプトの軍事的支援を抛り頼もうとすることに対する神のさばきと同時に、真の希望(救い)は神に信頼することから来ることを呼びかける内容となっています。イザヤ書の前半(1～39章)では、神のさばきと神の救いがコインの裏表のようにいつも一緒になって語られています。30章もそうです。

#### (1) 何もしないラハブ

●30章 1節で、ユダの指導者たちは「反逆の子ら」と呼ばれています。なぜなら、彼らが神から離れてエジプトのパロの保護を頼るようになっていたからです。しかし、パロの軍事的保護に頼ることは恥と侮辱(屈辱)をもたらすことを主はイザヤを通して語っています。

●そして、7節には「何もしないラハブ」というフレーズがあります。「ラハブ」(רַחַב)とは、「高ぶる、せがむ、攻撃する、傲慢になる、自慢する」を意味する動詞「ラーハヴ」(רַחַב)から由来したエジプトの象徴的名称です。新共同訳では「つながれたラハブ」、岩波訳では「休んでいるラハブ」、フランシスコ会訳では「無能なラハブ」、中沢洽樹訳では「動かぬラハブ」、原語的には「ヘーム(רַחַב)・シャーヴェット(תַּחַבֵּט)」なので、直訳的には「彼らは、何もせずに休んでいる、シャバットしている、安息している」というニュアンスが強いのですが、そもそもここはラハブに対して辛辣な皮肉を語っているわけですから、「つながれた」とか「無能な」とかいった訳にもなっています。ちなみに、イエシュアもユダヤ人の指導者に対してはかなり辛辣な皮肉を語っています(例え

ば、「目の見えぬ手引きども」とか、「白く塗った墓」 —マタイ 23:24, 27—などがそうです。

- そんな頼りにならないエジプトに頼ることがどんな結果をもたらすかを警告しています(12~14 節)。

【新改訳改訂第3版】イザヤ書 30 章 12~14 節

12 それゆえ、イスラエルの聖なる方は、こう仰せられる。「あなたがたはわたしの言うことをないがしろにし、  
しいたげと悪巧みに抛り頼み、これにたよった。

13 それゆえ、このあなたがたの不義は、そそり立つ城壁に広がって今にもそれを倒す裂け目のようになる。それは、  
にわかに、急に、破滅をもたらす。

14 その破滅は、陶器師のつぼが容赦なく打ち砕かれるときのような破滅。その破片で、炉から火を集め、水ためから  
水を汲むほどのかけらさえ見いだされない。」

● 上記の箇所にあるように、主のおしえを聞こうとしない不義に対する神のさばきは徹底しています。それは容赦のない破滅です。その特徴は二つの劇的な比喩的表現によって表わされています。ひとつは、城壁に広がる裂け目のように一瞬にしてもたらされる破滅(13 節)。もう一つは、土の器が打ち砕かれるような容赦ない完全な破滅(14 節)です。陶器師のつぼが砕かれたならば何の役にも立ちません。古代においては陶器の破片は何らかの利用価値がありました。しかし利用できる陶器がひとかけらもないほどに、粉々に打ち砕かれることが預言されています。そのようにユダのエジプトに頼ろうとする政策は全く無益であるどころか、きわめて悲惨な結果をもたらすことが述べられています。実際には、アッシリヤによるこのような破滅は回避されました。なぜなら、当時のユダの王ヒゼキヤと民が主に立ち返り、主を求めたからです。しかし、神以外の人間的な目に見えるものやかに頼ろうとする体質は変わることなく、やがて 123 年後の B.C.578 年にバビロンのネブカデネザル王によってエルサレムは破滅します。このときにエジプトにより頼もうとするユダの指導者たちがいたのです。このために預言者エレミヤは大変な苦しみを経験します。

#### 4. 立ち返って静かにすれば、あなたがたは救われる

- イザヤ書 30 章にあるユダ、およびエルサレムの徹底的な破壊の預言と同時に、神の救いの呼びかけのメッセージがあります。それが今回の説教のタイトルのフレーズにもなっている箇所です。30 章 15 節がそれです。

【新改訳改訂第3版】イザヤ書 30 章 15 節

神である主、イスラエルの聖なる方は、こう仰せられる。「立ち返って静かにすれば、あなたがたは救われ、  
落ち着いて、信頼すれば、あなたがたは力を得る。」

- この箇所をヘブル語のテキストをもとに逐語的に訳してみると以下ようになります。

まことに、こう言われた。私の主である神、イスラエルの聖なる方(が)

「**立ち返り** と **静まり** によって あなたがたは救われます。

**落ち着き** と **信頼** が あなたがたの力となります。」

- ここはヘブル語特有の修辞法であるパラレリズムになっています。しかも同義的パラレリズムです。

「立ち返り」「静まり」は名詞です。「落ち着き」は動詞の名詞的用法、そして「信頼」は名詞です。動詞は「救われる」と「(力)となる」で、ここの「力」は名詞ですが、その動詞を調べるならば、それがみなぎる力、増し加わる力、勢いとしての「力」(strength)であることが分かるのです。二語の漢字で表わすならば、図のように、

「悔改」(かいかい)、「静謐」(せいひつ)、「平穩」、「信賴」となります。

- ①「悔改」は、あなたの生き方を変えるように促している言葉です。
- ②「静謐」は、神の前にひとりになって過ごす祈りの生活です。
- ③「平穩」は、これはどんなことにもあわてない冷静沈着な態度です。
- ④「信賴」は、自ら一切画策することなく、完全に神にゆだねる姿勢です。



●これらはいずれも一朝一夕にして体得できるものではありません。多くの人々はこの神の呼びかけに対して、イザヤの時代の多くの人々が「それを望まなかった」とあるように、喜んで受け入れることができないものです。なぜなら、それは目に見えない保障であり、目に見える助けの方が安全だと思ってしまうからです。この神への不信がやがて自分たちの国を滅ぼすことになることを警告されているにもかかわらず、神に信賴することができないのです。

●神である主は預言者イザヤを通して、「立ち返って静かにすれば、あなたがたは救われ、落ち着いて、信賴すれば、あなたがたは力を得る」と救いを約束したにもかかわらず、ユダの人々はこれを望まなかったとあります。「望まなかった」とは、神に従うことを「望まなかった、欲しなかった」という意味です。「立ち返る」ことはそう簡単なことではないことが分かります。ところで、30章16～17節は難解です。どのように解釈すべきでしょうか。

【新改訳改訂第3版】イザヤ書30章16節

あなたがたは言った。「いや、私たちは馬に乗って逃げよう。」それなら、あなたがたは逃げてみよ。

「私たちは早馬に乗って。」それなら、あなたがたの追っ手はなお速い。

●「いや、私たちは馬に乗って逃げよう。」という訳の「逃げよう」ということばはどうしても「敵から逃亡する」というイメージになります。しかしイザヤ書の注解をライフワークとした樋口信平氏は、「逃げよう」と訳された原語の「ヌース」(נָס)をすばやい動きを示すことばだとしています。つまりここは、「疾走する」という意味で理解するならば、エジプトの馬をもってして敵陣に向かって疾走(突進)していくイメージとなります。それゆえ16節は、以下のように考えると理解しやすいはずで

「私たちは馬に乗って敵陣へと疾走しよう。」と。

それに対して主は、「ならば、そうしてみよ。」

すると民はなおも、「私たちは早馬に乗って(突進する)」と言います。

すると主は、「よろしい。ならば、そうしてみよ。むしろあなたがたの敵である(アッシリヤ)のほうが、

逆に(あなたがた以上に)すばやく動いて、追いかけてくる。」

●かなりの補訳ですが、これが16節の真意ではないかと思えます。その結果が、以下の17節に記されているのです。

ひとりのおどしによって千人が逃げ、五人のおどしによってあなたがたが逃げ、

ついに、山の頂の旗ざお、丘の上の旗ぐらいしか残るまい。

●結果としては、敵に容易に打ち負かされて、追い散らされて、山の頂には軍旗だけが残っているような、そんな悲惨な結果になるだけだということなのです。

#### 4. 忍耐をもって、待たれる主

●主の目には結果はすでに見えています。そんな彼らの罪をさばいて罰する必要があるにもかかわらず、なんと主は忍耐をもって、民が返ってくるのを待とうとしています。それが「それゆえ」で始まる 18 節の意味です。中澤訳のみが「それでも」と訳していますが、この訳語が真意に近いかも知れません。

【新改訳改訂第3版】イザヤ書 30 章 18 節

それゆえ、【主】はあなたがたに恵もうと待っておられ、あなたがたをあわれもうと立ち上がられる。

【主】は正義の神であるからだ。幸いなことよ。主を待ち望むすべての者は。

●原文には、「それゆえ」が同義的並行法(パラレリズム)によって二回あります。また、日本語の聖書では分からないのですが、18 節には意味を強める強意形ピエル態のヘブル語動詞が二つ使われています。ひとつは「待っておられ」(「ハーハー」(הָרָה)という動詞と、もうひとつは「あわれむ」(「ラーハム」(רָחַם)という動詞です。前者の「待つ」とは、神の民が悔い改めた後に与えようとする「恵み」をいつ与えようかと待ちわびているという意味での「待つ」です。また同義的並行法の次の行にある「あわれむ」も、そのときが来たならばただちにそうしようと「立ち上がる」構えをもっていることを意味しています。ここに神の正義があります(「正義」と訳された原語は「ミシュツパート」)。「まことに主は、正義(ミシュツパート)の神」とあるように、「ミシュツパート」は神の統治理念を総称する語彙です。そのことのゆえに、「主を待ち望むすべての者は」、「幸いなことよ」と言っているのです。

●もう少し説明を加えると、「待っておられる」と訳された動詞は「ハーハー」(הָרָה)で、放蕩息子の父がいつ帰って来るのか分からない自分の息子を忍耐と期待をもって待っている(ルカ 15:20)ニュアンスの動詞です。「ハーハー」の名詞「ハッカー」(הָקָר)が「釣り針」を意味するのもうなずけます。そして、ひとたび民が主に立ち返るなら、主は彼らを「あわれもうと立ち上がられる」のです。これも放蕩息子の父のイメージです。「もう私は、あなたの子と呼ばれる資格はありません。」という息子に対して、父はなんら責めることなく、彼を受け入れ、最高のもてなしをしています。これが「あわれもうと立ち上がられる」ということばの意味です。

●同じく 18 節に「幸いなことよ。主を待ち望むすべての者は。」とありますが、ここでの「待ち望む」も、主が民に対して示している「ハーハー」と同じ語彙が使われています。つまり、主の民が、主を信頼して、忍耐と熱心な期待とをもって主を待つことを意味します。そのようなかかわりを「幸いなこと」だとしています。このフレーズはイザヤ、あるいは「人称なき存在」(御霊)の声と考えることが言えます(詩篇 1 篇の冒頭を参照)。そして 20~21 節には「主を待ち望む者たち」に臨む「幸い」の一つが語られています。それが以下のことです。

【新改訳改訂第3版】イザヤ書 30 章 20~21 節

20 たとい主があなたがたに、乏しいパンとわずかな水とを賜っても、あなたの教師はもう隠れることなく、  
あなたの目はあなたの教師を見続けよう。

21 あなたが右に行くにも左に行くにも、あなたの耳はうしろから「これが道だ。これに歩め」と言うことばを聞く。

●20 節の「教師」と訳されたことばは名詞の「モール」(מֹר)で、「導く方」「師」「導師」とも訳されています。複数形が使われていますが、動詞が単数であるため、ここでは「神」を表わす「エローヒム」(אֱלֹהִים)と同様に、**畏敬の複数**と考えられます。ここでの「教師」は神のトラーの真意と秘密を教えることのできる教師です。20 節の「たとい主があなたがたに、乏しいパンとわずかな水とを賜っても」とは、バビロン捕囚での生活を預言しているとも考えられます。しかし、「あなたの教師はもう隠れることなく、あなたの目はあなたの教師

を見続けよう。」とあるのは、ある種の永遠的な教師の存在を感じさせられます。とすれば、ここでの「教師」は神、あるいは、神に油注がれた預言者だと考えるならば、メシア・イエシュアの他にはおりません。このメシア・イエシュアこそ民たちの歩みの明確な方向を示して下さる「教師」に他なりません。

●イザヤの時代のユダの人々は、主のおしえを聞こうとしない者たちでした。それゆえに神は彼らを罰し、神の正義を示すと同時に、彼らが悔いて帰ってくる折りには、「あわれもうと立ち上がられ」、祝福を与えて下さる方なのです。しかしこのことが完全に実現するのは、神のマスタープランによれば、メシアが再臨するときです。そのときには、霊的な目と耳の障害は完全にいやされ、神の民たちは自分たちの教師を見続け、また主のおしえを聞き続けるようになるのです。メシア王国は一つの国です。国には国を統治する王がおり、その王に従う民がおり、彼らが烏合の衆にならないための「主のおしえ」がなくてはなりません。そのおしえに喜んで聞き従っていく「その日」がやがて訪れるのです。

●ちなみに、その語られる教師の声の内容が新改訳と新共同訳とではニュアンスが異なっています。

①【新改訳改訂3】

あなたが右に行くにも左に行くにも、あなたの耳はうしろから「これが道だ。これに歩め」と言うことばを聞く。

②【新共同訳】

あなたの耳は、背後から語られる言葉を聞く。「これが行くべき道だ、ここを歩け／右に行け、左に行け」と。

●新共同訳の場合は、あなたがたの行くべき道として「右に行け、左に行け」と指示する声を聞くというような翻訳です。しかし新改訳の場合は、たとえあなたが右に行こうと左に行こうとかわりなく、「これが道だ」という声を聞くとしています。原文を見る限りは新改訳の方が原文に近いように思います。つまり、あなたがたが右に行こうが、左に行こうがかかわりなく、背後から教師(導く方)の声を聞き、「これがその道、そこを歩め」という声を聞くようになるということです。「その道」(「ハ・デレフ」**דֶּרֶךְ**)とは「正しい道」です。神にとって「正しい」(「ツァッディーク」**צַדִּיק**)とは、善悪的な倫理概念よりも、神と人との正しい関係概念だと理解すべきです。「両者間の真っ直ぐな関係」、「両者間の最善なかかわり」のニュアンスです。つまり 21 節は、あなたが右に行こうと左に行こうと、主との最善のかかわりが保たれるような道に歩むように、背後から主が声をかけて下さるという意味なのです。決して、右に行けとか、左に行けといった命令の指示を背後から与えるというのではなく、むしろ、最善のかかわりとして愛と信頼の中で自由に歩むようになるという意味なのです。

●神の民は、預言どおり、バビロン捕囚によって神のトーラーにある神の愛に目が開かれ、トーラーライフスタイルを二代・三代かけて築きました。そうした中に、「エズラ」のようなみことばの教師がいたことは事実です。そして、彼らは再び神の民として整えられてエルサレムに新しい民として帰ってきたはずですが、しかし真の教師によって私たちが導かれるのはメシア王国においてなのです。

## 最後に

●イザヤ書 28～33 章は一つのまとまりを持っています。アッシリアの勢力に脅かされ、エジプトの軍事的援助に拠り頼もうとしていたユダの指導者、エルサレムに対する神のさばきのことばが記されていると同時に、真の希望は、静かに穏やかにして主なる神に信頼することから来ることを、神の定められたマスタープランを啓示することで、つまり、永遠の相の下で、預言書は教えようとしているのです。

2014. 9.14